

フィジーの開放系漁村における海洋資源利用と社会 経済構造 レワ州ワインガナ集落の事例研究

著者	西村 知, 鳥居 享司, 河合 溪, 小針 統
雑誌名	奄美ニューズレター
巻	36
ページ	1-14
URL	http://hdl.handle.net/10232/17942

■研究調査レビュー

フィジーの開放系漁村における海洋資源利用と社会経済構造
—レワ州ワインガナ集落の事例研究—*西村知（鹿児島大学法文学部）・鳥居享司（鹿児島大学水産学部）・
河合溪（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）・小針統（鹿児島大学水産学部）

1. 研究の目的

農漁村に居住するフィジー先住民の多くは、村落で収穫、採集・採捕できる農産物や海産物に依存した社会経済システムで暮らしている。これらの産物は、自家消費されるとともに一部は販売される。また、村の中で贈与されることもある。よって、彼らにとって土地、海岸・海洋などの自然環境の状態を維持すること、適切な資源利用を行うことは、村落経済の持続的発展にとって不可欠である。自然環境、資源の利用・維持は村落の性格によって大きく異なる。村落外との社会経済との関連性を基準とした場合、「閉鎖系」村落と「開放系」村落に区分することができる。われわれは、これまで、血縁と地縁とが直結し、比較的、市場から離れた「閉鎖系」の2村落を調査してきたが、本稿で対象とする村落は「開放系」の村落である。

調査地のワインガナケ集落は、首都のスバ市まで約6kmと、かなり近接している。交通インフラも恵まれており、村人の村外での就労、生産・収穫物の市場での販売は比較的、容易である。また、村人は、血縁関係のない者を多く受け入れている。本稿は、このような「開放系」の村における自然資源の利用と社会経済構造との関係性を、貝類のカイコンに焦点を当てて、聞き取り調査のデータの分析をおこなうことによって明らかにする。

2. ワインガナケ村の社会経済構造

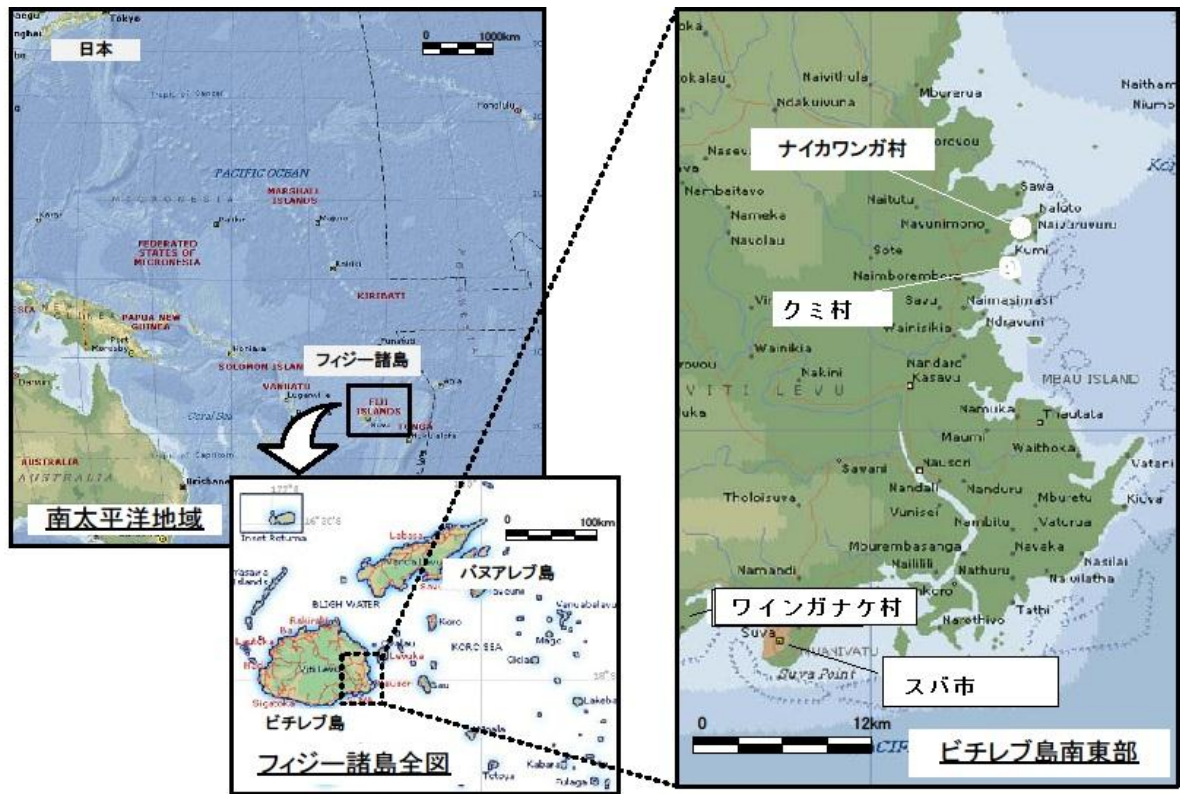
2.1 調査地の位置と特徴

ワインガナケ集落は、首都スバ市の西に位置する海岸部の村である。(図1)。村からはスバ市の町並みを目視することができ、村人は小型バス以外にも、小型モーターボートでアクセスしている。2011年、8月のデータでは、世帯数が、48、人口は243人であった。

フィジー先住民の居住地は、大親族集団のヤブサ(yavusa)、小親族集団のマタンガリ(mataqali)によって構成されている。マタンガリが共同土地所有単位となっている。調査地のヤブサは、ナヴァカヴ(Navakavu)であり、多くのマタンガリで構成されている(表1参照)。コロと呼ばれる中心集落は、5箇所存在しており、ワインガナケ村がそのひとつである。この集落には、5つのマタンガリ(ワイタンブア(Waitabua)、ナセイ(Nasei)、ナバラマイ(Nabaramai)、ナトンドレ(Natodre)、ナカウベンガ(Nakaubeqa))に属する者たちが中心に居住している。コロの土地はワイタンブアに属する。この村落の特徴は、ヤブサ内のマタンガリの土地が、再分化されて点在していること、コロが複数存在するこ

とである。われわれが以前に調査したタイレブ (Tailevu) 州のヤブサ、ナイカワンガやヤサでは、ヤブサ内の土地がマタンガリの数だけきれいに区分されており、コロは一カ所のみ存在していたのとは対照的である (図2参照)。マタンガリの境界線は、イギリス統治下の1918年から数年の間に設定された。この境界線は、当時の村落での土地に対する人口庄の多様性を物語っているといえる。比較的、人口密度の低い土地では、ゆるやかな土地所有構造が出来上がったが、人口密度の高い土地では、「より良い」土地の獲得競争が激しく、調査地のように、より細分化された土地所有構造が生まれたと考えられる。「より良い」土地とは、より資源に恵まれた海に近接し、より耕作しやすく肥沃な土地を有することを意味する。マタンガリの境界線が引かれた時の人口密度は、自然資源に乏しい場所が低いという傾向にあると考えられる。しかし、自然資源が豊富であっても部族間の争いによって結果的に少ない部族が残ったという事例もあるであろう。われわれが以前に調査したナイカワンガ・ヤブサではマタンガリ制度以前の土地を巡る部族間の熾烈な争いがあったという歴史について調査することができた。また、同じく過去に調査したヤサ・ヤブサのヤサは、「探す」という意味のフィジー語であり、具体的には、「良い土地を探す」ことの意味であるとの説明を村民から受けた。マタンガリ制度は、良い土地を求めて、移動し、場合によって部族間闘争を繰り返していたフィジー先住民を定着させたのである。

図1 調査地の位置



出所: <左図・右図> Encarta Online <http://encarta.msn.com/>
 <中央図> Fiji Government online http://www.fiji.gov.fj/publish/fiji_map.shtml

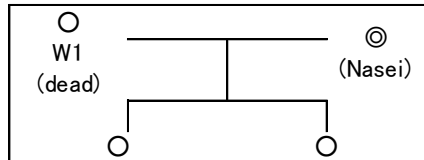
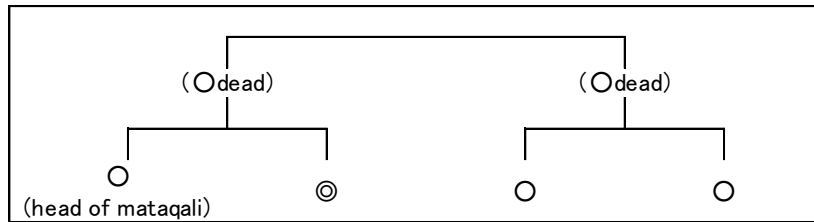
研究対象位置図

2.2 外に開かれた村：タタウケキ

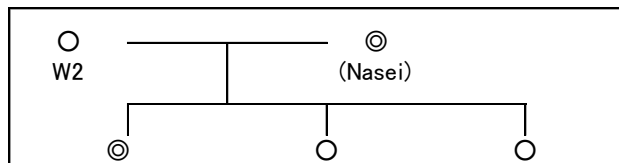
ワインガナケ集落には、5つのマタンガリ構成員が住む。かつては、7つのマタンガリの構成員が住んでいた。これらのマタンガリの中で、ワイタンブアは特に、マタンガリ構成員ではないが、準構成員とみなされ、マタンガリが責任を持って世話をし、タタウナキ (tataunaki) が多く存在する。ワイタンブアは5つの大家族が存在するが、正規のマタンガリ構成員の大家族は一つのみである。残りの3家族のうち、一人は独身の時にコロに小学校が初めて来たときにナモシ (Namosi) より教師として招かれた男性 (死亡) の家族である。その他の2家族の世帯主 (ともに死亡) は、畑の労働力として、招かれたものである。一人は、ナモシの出身、もう一人はカダブ島 (Kadavu) の出身である。しかし、これらの3人の男性は同じヤブサに属するナセイ (Nasei) の女性と結婚しており、子供たちはヤブサ内で母方の血縁関係はあるが父系社会のフィジーではマタンガリの構成員とはみなされない。このほかに、数年の任期でコロに滞在する宣教師 (talatala:タラタラ) もワイタンブアの一員とみなされる。このようにワイタンブアでは、世帯数だけからみると、マタンガリの構成員が少数派となっており、タタウナキが多数派を占める (図3参照)。しかし、土地の利用や重要な取り決めはマタンガリ構成員が中心に決めるので、タタウナキはあくまでも「世話をされる存在」にすぎない。以前に調査したナイカワング・ヤブサでもタタウナキは、少数ながら存在した。このヤブサでは、自己消費、販売において重要なキャッサバの世帯ごとの耕作面積を調査したが、タタウナキの耕作面積は、平均よりかなり低く、正規のマタンガリ構成員よりも下位に位置づけられていることが明らかになった。

なぜ、ナバカバでは、このように、複数のマタンガリの構成員が同じコロに住むのであろうか。そして、なぜ、コロが複数存在するのであろうか。その答えは、住民にとっての土地と海との重要性のバランスが関連していると考えられる。前述のナイカワングでは、現金の収入源として、農産物も海産物と同様に重要であった。そこで、各マタンガリは自らの共同所有地に住みそれぞれの集落を設けている。しかし、ナバカバでは、現金収入源は多様で豊富な海産物が大半を占める。ナバカバの住民は、マタンガリの土地に関係なく、海岸に近接した場所に住み、限られた土地における人口増加が複数のコロを生み出したと考えられる。実際、ワインガナケにおいても、二つのマタンガリ構成員全員が別のコロに移り住んでいる。住民によると各マタンガリの農地はほんの一部が作付されているのみであり、多くの土地が農地としては利用されていない。そして、このような、海岸に近い場所に居住するという傾向は、距離的な近さ、およびバス路線の充実による交通の面でのスバへのアクセスが加速させていると考えられる。それでは、なぜワインガナケでは、ワイタンブア・マタンガリのようにタタウナキが多く存在するのであろうか。これは、住民へのスバへの移住等による人口の減少あるいは漁労活動による農作業労働者の不足が考えられる。しかし、このようなタタウナケの受容は、マタンガリによって異なる。例えば、ナトンドレ・マタンガリでは、11世帯のほとんど (9世帯) の世帯主はマタンガリ構成員である (図4参照)。2世帯は、世帯主の配偶者がマタンガリの構成員である。つまり、世帯主夫婦が非マタンガリ構成員の世帯は存在しない。ナカウベンガ・マタンガリは4世帯のみであるが、すべての世帯主がマタンガリ構成員である (図5参照)。

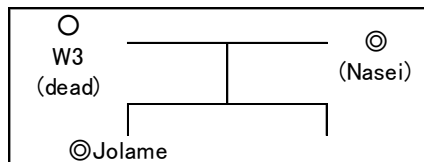
図3 ワイタンブア・マタンガリの家系図



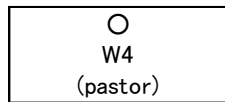
W1は独身の時に、ワイタンブアに小学校の教師として赴任し、同じヤブサ内の異なるまたンガリの女性と結婚し、2人の子供が生まれた。



W2の父親は農業を手伝うためワイタンブアに移住した。



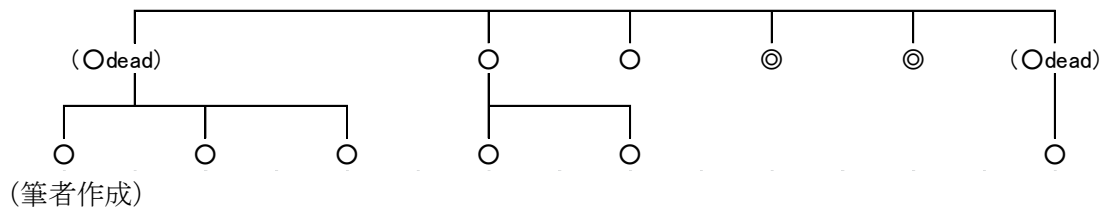
W3は農業を手伝うためにワイタンブアに移住した。



W4は牧師である。

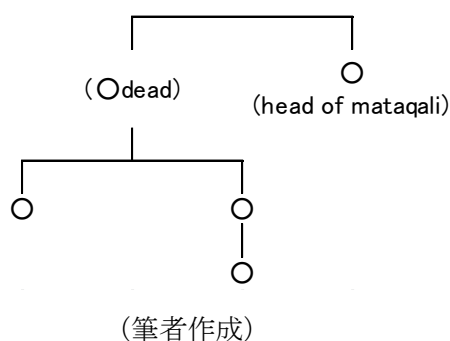
(注) ○は男性、◎は女性である。W1,W2,W3,W4はタタウナキ（非マタンガリ構成員）
（筆者作成）

図4 ナトンドレ・マタンガリの家系図



(筆者作成)

図5 ナカウベンガ・マタンガリの家系図



3. ワインガナケ村における自然資源利用

村人の収入は海産物販売、農産物販売、地代、賃金所得順で重要である。村には1996年より電気が通っており、TV、冷蔵、電気の料理用コンロ、洗濯機などを所有するものもいる。水道施設については、パイプが整備されておらず、いずれの家庭でもタンクを利用している。村人にはスバで働く者もいる。海外労働者は比較的少ない。村とスバとのアクセスはインド系フィジー人が経営するバス会社、SohBusの路線のおかげで良い。スバへは午前中は4便(6am,7am,8am,9:30am)、午後は6便(1pm,3pm,4pm,6pm,6:30pm,8pm)の合計10便である。バスは62-81人乗りである。

海産物

魚、カイコソ、その他の貝類、ウニ、ナマコ、タコの販売が主な所得源である。しかし、1960年代以降、スバに近いこの村ではセメント工場や大型船舶が増えたために、水質は劣化している。海にはゴミ、油が増え、さらに船舶の残骸からも油が流出している。これらが原因でマングローブがダメージを受けている。FLMMA(フィジー政府、南太平洋大学、NGOのネットワーク型の住民管理によるフィジーの沿岸資源管理プロジェクト)との共同作業で禁漁区(MPA)が設定され水産資源の増大の努力も図られている。収入源としては魚、カイコソ、ウニの順で重要である。魚は、船でアイスボックスに入れて運ぶ。生でスバのクリーク沿いの公設魚市場でミドルマンに売る。一束(bundle)が15フィジードルである。魚はフライにして、スバの公設市場で売ることもある。また、中国人にシジ(sici: Oregon Atlantic Trop)などの貝殻をスバ公設市場で売ることもある。村人は週3回程度(水曜、木曜、土曜)スバの公設市場でこれらの海産物を販売する。市場にはバスで行く。村からバスは出て、約一時間で市場に到着する。片道は1.60フィジードルである。朝6時のバスで出かけ、市場には泊まらないでその日に村に帰る。カイコソを販売する場合、特に女性は、wheel borrow(リヤカー人夫)を利用する。料金は2フィジードルである。市場での、販売ブロックの使用量は一日3.7フィジードルである。以下は主要な商品についての情報である。

カイコソ (kaikoso)

他の村と同じく、ワイガナケにおいてカイコソを採捕するのは主に女性である。USP や FLMMA などと一緒に設定した MPA を除く海域でカイコソを採捕している。3種類あるが、最も大きな種のみが販売用である。生で殻つきのまま売るか、茹でて売る。生の場合、一山 (heap) が 3-4 フィジー・ドルである。茹でたものは、アイスクリームコンテナが 20 フィジー・ドル、小型のタッパーが 5 フィジー・ドルである。村では、四分の一 (40 世帯のうち 10 世帯) の世帯がカイコソを捕獲している。

ウニ (cawaki)

バスケット (5 フィジー・ドル) でそのまま売るか、身だけを取り出したものを売る。後者の場合、アイスクリームの大型コンテナが 20 フィジー・ドル、小型のタッパーウェアが 5 フィジー・ドルである。

タコ (kuita)

生で売る。大きさによって価格が異なる。大中小はそれぞれ、20 フィジー・ドル、10 フィジー・ドル、5 フィジー・ドルである。

ナマコ (dairo)

村でボイルし、中国人、台湾人のバイヤーにスバの市場まで運び売却する。主なナマコバイヤーは Gold Hold 社と Star Dragon 社 (台湾) である。乾燥させるのはバイヤーの仕事である。種類によって異なる。白いものは 24 フィジー・ドル/kg で黒いものは 13-14 フィジー・ドル/kg である。著者は、スバ市の Star Dragon 社の調査をおこなった。この会社の向上は、南太平洋大学 (USP) 近くの Watuwaqa (ワトゥワンガ) の倉庫街にあった。ワイガナケの村人はここまでナマコを運ぶ。経営者は台湾人の Kun 氏である。23 年前に経営を開始した。工場では、常勤は雇わず、短期で労働者を雇う。一日に工場働くのは、5-1 人程度である。ナマコが主な製品であるが乾燥したサメのヒレも扱っている。彼は、ビチレブ島中から生あるいは半乾燥させたナマコを購入している。村人が個人で少量、あるいはミドルマンが大量に工場にナマコを持ち込む。ナマコには 15-16 の種類がある。白いナマコの買い上げ価格が最も高い。工場では、まずお湯で茹でたあとに成形して 3 日程度、塩漬けにする。その後、塩を洗い一時間程度また茹でる、そして 2,3 日、オーブンでスモークさせる。最後に梱包して出荷する。出荷先は主に香港である。

その他の海産物

イカは、\$11 (生) 程度である。ロブスター (生) は 30 フィジー・ドル/kg である。Yaga (ヤンガ) という貝 (生) はバスケットで 5 フィジー・ドルである。

海産物以外の所得

農産物販売は海産物ほど重要ではないが、キャッサバ、キュウリ、ベレ (bele) などをスバの公設市場で販売する者もいる。また、地代を得ているマタンガリもある。Native Land

Trust Board (先住民土地委員会) を通じて地代はマタンガリに支払われるしかし、これは、外国人の観光業者に対するもののような大規模なものではなく、フィジーを対象にした幹線道路の住居に対する地代である。海外労働者は少ない。1987年から1989年にかけてニュージーランドに多くの村民が農地の開墾のための労働者として出稼ぎに出たことがある。

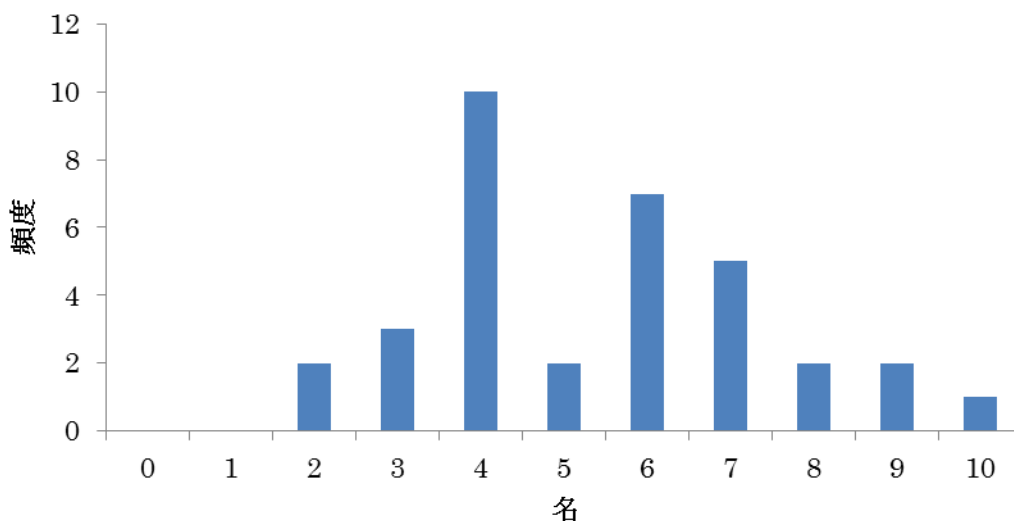
4. ワインガナケ村の社会経済構造の特徴と自然資源利用

われわれは、ワインガナケ集落において、2011年8月16日より22日の一週間、社会経済構造と資源利用の関係を特にカイコソに焦点を当てて、アンケートシートを用いて、調査した。インタビュー調査を始める前に、村人の数人から概況を聞き、データ収集のための準備をおこなった。村人においては、調査項目は、世帯構造、収入構造、支出構造、カイコソの採捕、消費、販売、贈与などに関するものである。調査は、48世帯のうち、40世帯に対しておこなった。この調査結果を基にして、重要な項目に関する創刊分析を行い、集落の基本的な社会経済構造を理解する作業をおこなった。

世帯構造

ワイガナケの一世帯あたりの世帯員数は2名から10名まで広がりがあるが、平均世帯員数は5.2名である(図6)。ワイガナケの一世帯あたりの世帯員数は2名から10名まで広がりがあるが、平均世帯員数は5.2名である。独居世帯は存在しない。われわれが以前に調査したタイレブ州、クミ村では、老後を過ごすために都会から戻ってきた者など多くの独居世帯が存在したのとは対照的である。4人世帯が最も多く、それに6人世帯、7人世帯が続く。以前に調査しヤサ・ヤブサでは、老人を中心とした独居世帯が見られたが、ワインガナケでは皆無である。ヤサ・ヤブサでは、都市で長年生活し、配偶者を亡くした後、村に単身で戻る「Uターン」が見られたが、ワインガナケではそのようなケースは確認されなかった。

図6 世帯員数



収入構造

アンケートでは、収入に関しては、給与所得、農産物・海産物の販売、地代、年金、生活保護、送金収入について聞き取りを行った。これらの項目の総計を総収入とし、給与、商品販売による収入を自己収入とした。世帯あたりの総収入をみると100～399フィジードル/週の範疇におさまる世帯が多く、平均総収入は208.3フィジードルである(図7)。自己収入の平均は187フィジードル/週である。総収入に占める自己収入の割合は89.9%、仕送り8.7%、年金1.5%、生活保護0.4%である。また、総収入と自己収入の相関関係はかなり強いことから、各世帯の収入は、それぞれの労働による対価が中心を占める傾向が強いことが分かる($R^2=0.95$) (図8)。

図7 総収入

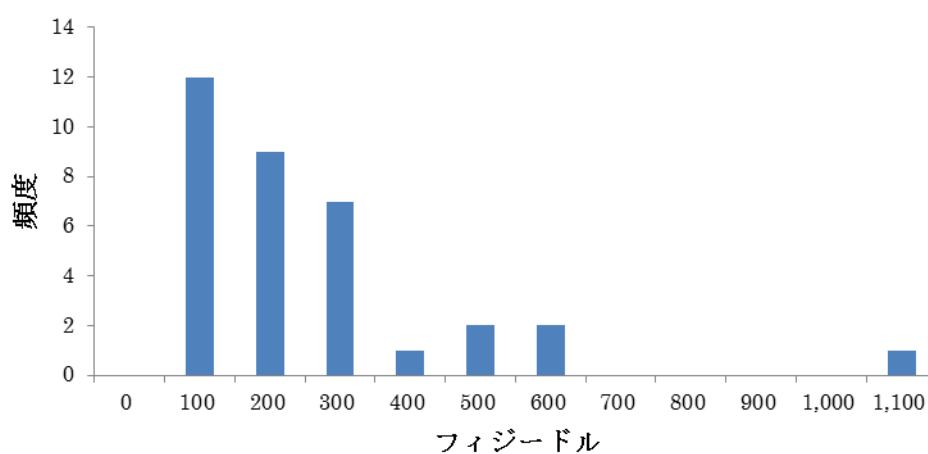
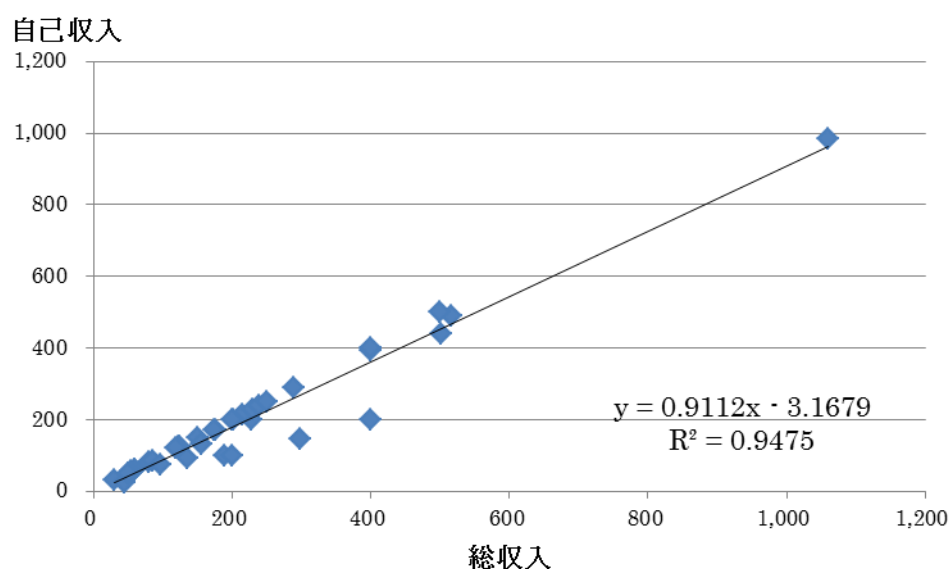


図8 総収入と自己収入の関係



カイソンの採捕・販売・贈与

一週間あたりの操業日数をみると、40%を超える住民が0日である。それに続いて2日

(20%), 4日(15%), 1日・3日(12%)である(図8)。カイコの採捕量をみると10heap以下の場合が多い。世帯あたりの平均採捕量は9.2heapである。一方、世帯あたりのカイコ消費量は0.5heapであり、採捕量に比べて消費量はごく僅かである(図9)。では、採捕したカイコをどのように扱っているのだろうか。採捕量と販売量の相関関係をみると非常に強いことが分かる($R^2=0.99$)(図10)。カイコの販売量は7.2heap, 贈与は0.3heap, つまり、カイコ採捕の目的は自家消費や贈与ではなく販売すること, つまり商品として意識され採捕されていることが分かる。それ故、自家消費にまわるカイコは極めて少量である。

それでは、どの階層区分の世帯にカイコは多くとられているのだろうか。採捕量は採捕回数に単純に比例するわけではなく、漁場選択、採捕技能、天候などの影響をうけることから、総収入と採捕回数の関係をみると、相関関係は認められない($R^2=0.07$)。つまり、総収入の多寡とカイコ採捕頻度には関係性が認められず、カイコを大量に採捕して経済的に裕福になる、経済的に貧しい世帯はカイコをより多く採捕しようとする、といった行動様式はとられていない(図11)。カイコの販売活動が世帯の収入にどの程度貢献しているのかみると、総収入の13.2%, 自己収入の14.7%がカイコの販売によるものであり、カイコはワイガナケの人々にとって重要な現金収入をもたらす商品であることがわかる。

図9 カイコの採捕頻度(回/週)

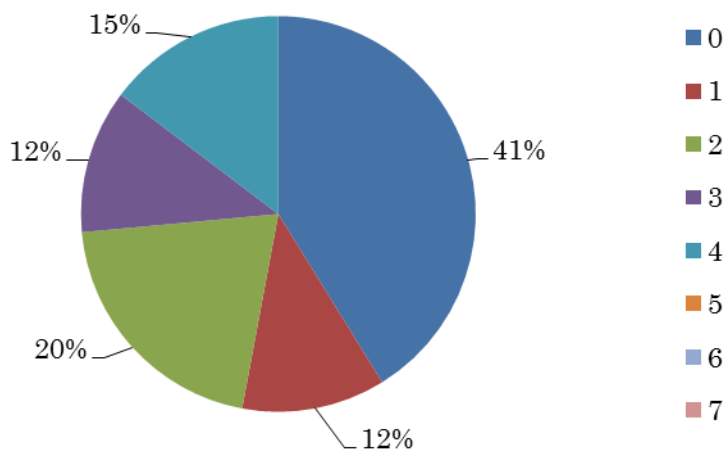


図 10 カイコソの採捕量と販売量の相関関係

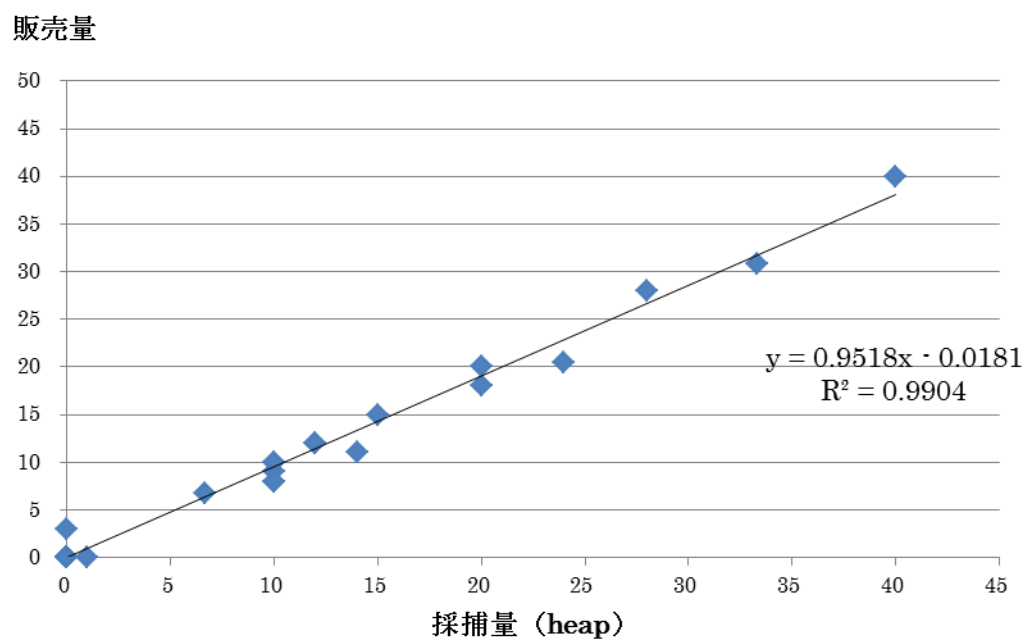
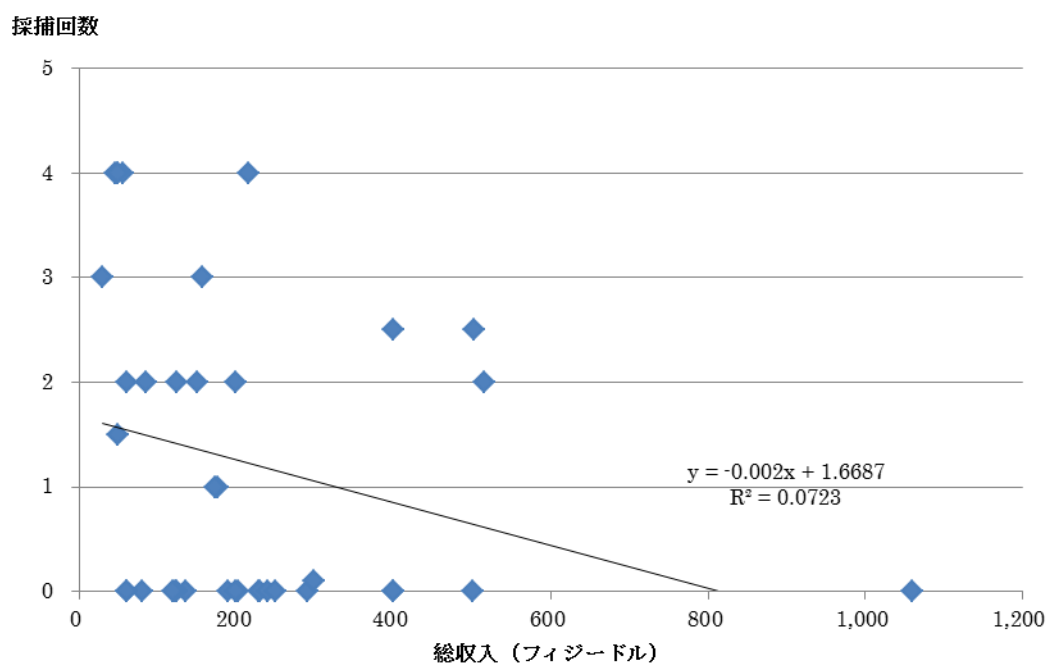


図 11 総収入とカイコソ採捕回数との関係



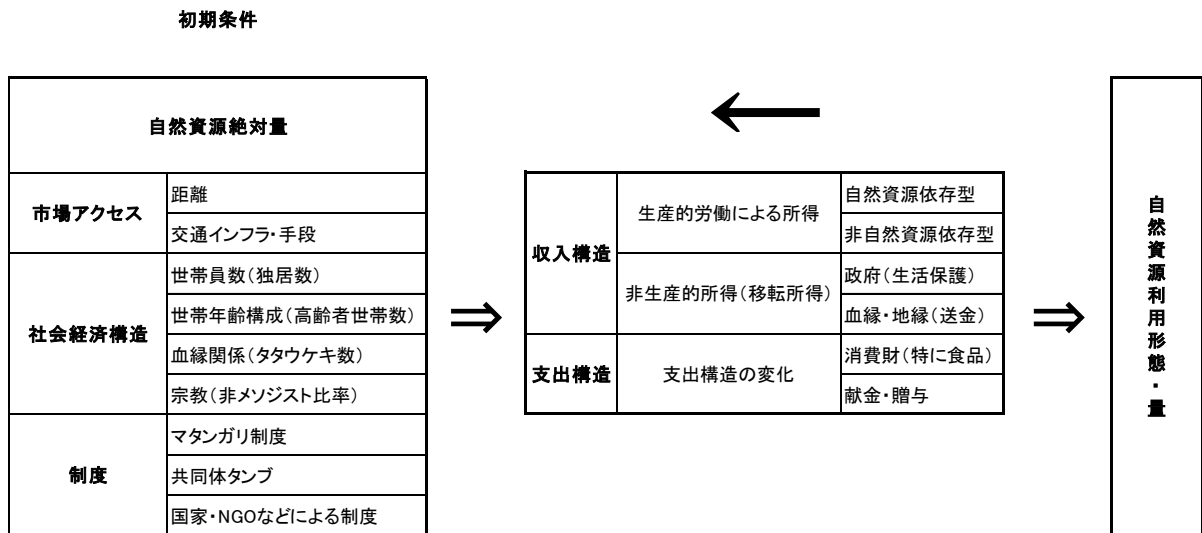
5. ワインガナケ集落における資源利用：決定要因は何か？

ワインガナケ集落は、スバ市に近く、村の住民はマタンガリの構成員以外（タタウケナ）を多く含む。また、同一のマタンガリがヤブサ内に細分化している。これらの要因は、村の共同体的な結束にマイナスの影響を与えると考えられる。この村の平均収入は比較的高いが、多くの村民（40世帯中10世帯）がカイコソを採捕している。カイコソはほとんど消費、贈与されることもなく、販売される。消費率が低いのは、村民が村外から食品を購入することができるからであろう。贈与が少ないのはいくつかの要因が考えられる。まずは、タタウケナ、マタンガリの点在性によって村の相互扶助的性格が弱いからであろう。次に考えられることは、食物の贈与を必要とする老人を中心とした独居世帯が皆無であることである。また、全体的な特徴として貧困世帯が少ないこともその理由の一つであろう。カイコソ販売に関して特筆すべきことは、世帯の収入額とカイコソ採捕量・回数に相関関係がないことである。この村は、生活保護や村外からの送金などのいわゆる世帯の生産活動とは関係のない移転所得の割合は低く、村民の経済活動による比較的自立した経済構造であるといえる。しかし、自然資源採取型経済の段階にとどまっており、カイコソなどの村内の自然資源は依然として、重要な所得の源泉である。村内の所得に対する自然資源への依存率が低下するまでは、自然資源への圧力は大きく減少することはないであろう。

このワインガナケ村の調査結果から、村落の社会経済構造と自然資源利用を決定する要因についてどのようなことが言えるであろうか。まずは、村落の初期条件が重要であるということである。まず、自然資源の絶対量が重要であることはいうまでもない。次に、村落と主要な市場との物理的距離や道路、交通手段の整備が重要である。市場へのアクセスの良さは商品販売の取引費用を減少させ、自然資源の商品化を加速させるであろう。しかし、前述のように、収入の増加は、村外食の増加をもたらし、結果的に、村内産の食品の消費を減少させるであろう。三番目に重要なのは、村の共同性の強弱である。ワインガナケ村のように非血縁関係者が多いこと、マタンガリ住民の散住は共同性を弱める方向に働くと考えられる。また、血縁関係の有無に関わらず都市からのユータン者が増えることも村の共同性を弱める。特に宗教が関係する場合は重要である。例えば、ワインガナケ村では、村民のほとんどがメソジスト派のキリスト教徒であるが、AOG (Assembly of God) や SDA (Seven Days Adventist) などの他の宗派のキリスト教徒も少数ではあるが存在する。これらの少数派の信者は経済行動においても異なる。メソジスト派は、毎週日曜日に村の中にある教会で礼拝をおこない、献金もする。しかし、これら少数派は、村の外の教会で都合がつく時に礼拝をおこなう。献金に関する金額や回数も当然、異なってくる。また、宗派によっては、メソジスト派が通常、食する食品の摂取が禁止されている場合もある。カイコソがその一例である。女性が、カイコソを捕獲し家族が食するという村での一般的な食生活が禁止されているがゆえに自給、販売のための労働（カイコソ捕獲）も行なわないこととなる。これらの共同性に関わる要因は、献金の減少、消費の減少をもたらし、結果的に自然資源に対するマイナスの圧力となるであろう。しかし、共同性の弱体化は逆の側面を持っている。共同体的なモラルの低下や個人主義の浸透は、共同体的な自然資源管理能力を低下させ、村の住民による自然資源の乱獲を引き起こされる可能性もある。以上

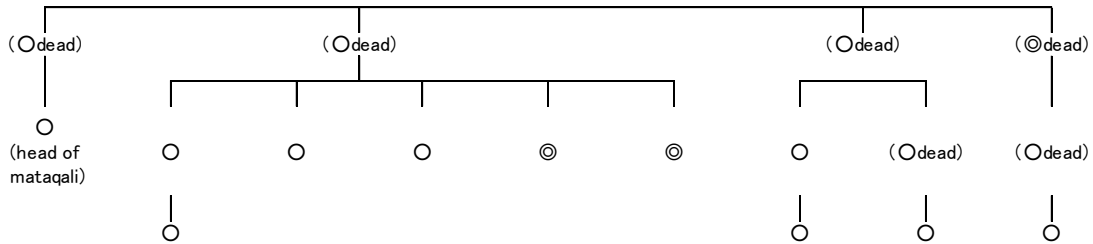
を整理すると、次のようになる。村の資源管理において社会経済的初期条件が重要である。次に市場へのアクセスが重要である。そして、この両者のバランスを取る機能が村の共同性である。村の共同性は、初期条件と商品経済化の多様なプロセスによって形作られる。また、この共同性は、住民のみではなく、FLMMAによるMPAのといった住民と外部者によって形成されるものが存在することも忘れてはならない。この循環的プロセスを図示したのが図12である。

図12 フィジー先住民村落における自然資源利用と社会経済構造

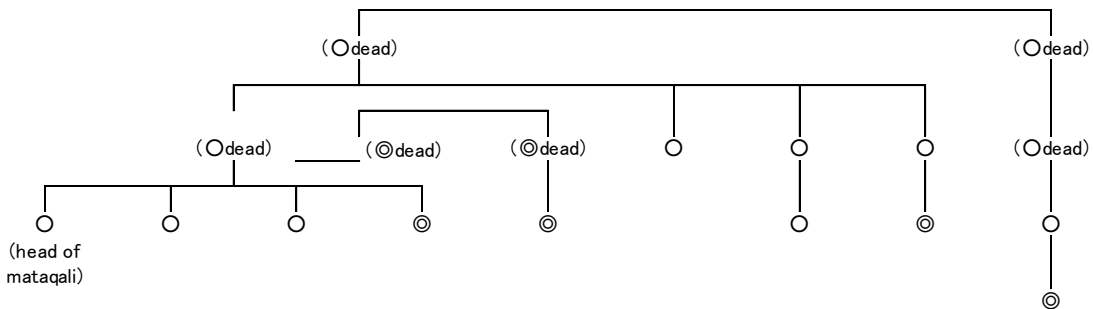


<参考資料>

ナバラマイ・マタンガリの家系図



ナセイ・マタンガリの家系図



(筆者作成)

*本研究は、科学研究費基盤 B による共同研究（平成 21-23 年度、研究課題『南太平洋島嶼沿岸部における「人と自然の連動システム」に関する学融的研究』、研究代表者、鹿児島大学教授、河合溪）による共同研究成果の一部である。

謝辞

フィジーでは、レワ州、ナヴァカヴ・ヤブサのワインガナケ集落、タイレブ州、ナイカワング・ヤブサおよびクヤサ・ヤブサの住民の理解と協力のおかげで現地調査をおこなうことができた。また、USP（南太平洋大学）で教鞭を取るベイテヤキ氏、ビデシ氏からはフィジー人観点から多くのアドバイスをいただいた。これらの方々との対話からわれわれの問題意識、研究方法、政策提言などは生まれている。心から謝辞を述べたい。